

WS： カントの論理思想の現代性—19世紀論理哲学再考・1

提題者・題目（発表順）

五十嵐涼介（京都大学・学術振興会）

「カント論理学の形式的分析」

細川雄一郎（首都大学東京 OD）

「超越論的論理学の構想における様相論理と遷移構造」

岡本賢吾（首都大学東京・オーガナイザ）

「なぜポスト・カント論理哲学を再評価するか」

本 WS 全体の企画趣旨：

近年、新カント派をはじめ、さらに遡ってボルツァーノ、ロツツェといった、ポスト・カント期の論理哲学に対する再評価が大きく進んでいる。この傾向がただの“尚古趣味”でないとするれば、それはなぜだろうか。従来、定型化していた見方によると、(1)一方でいま名を挙げた哲学者たちの論理理解は、基本的に、現代論理学（とりわけ、フレーゲ以降の量化論理）の水準には到達しておらず、あるいは、その傍らを単に素通りしてしまっており、(2)他方これと対照的に、例えばカルナップに代表される論理実証主義者こそが、まさに量化論理を哲学に大きく導入・適用したフレーゲの正統な後継者だ、とされる。このような見方の結果、現代論理学との関りで近代哲学の展開を振り返る作業においては、概して論理実証主義とその周辺が主題化されるにとどまり、新カント派などの上記の哲学者たちは、高々付随的に言及されるのみで、基本的に等閑視されることになったのだと考えられる。

しかしながら、改めて丁寧に事情を見直してみると、上記(1)(2)の見方はあらゆる面で疑わしい。なぜなら、ごく単純に言っても、(a)現代のフレーゲ解釈の豊かな蓄積を踏まえれば容易に判る通り、例えばフレーゲの意味理論について、カルナップをはじめとする論理実証主義者たちが抱いていた理解は甚だしく素朴であり、あるいはそもそも単なる無知かつ無視に近く（この点で、当時におけるフレーゲの最大の——もしかすると唯一の——理解者であったウイトゲンシュタインが、論理実証主義の哲学に対して、部分的に共有する論点があっても、基本的に徹底した拒否と軽蔑の態度を貫いたことは、ごく当然と思える）、(b)またそれ以上に、ボルツァーノ、ロツツェ、コーヘン、さらにはカッシーラーらの所説を詳しく見ると、フレーゲ、ウイトゲンシュタインとの共通性や、さらにはこの二人をも凌駕した、より先鋭でクリエイティブな現代性さえ認められるように思われるからである。

本ワークショップは、このような観点の下に、ポスト・カント論理哲学再評価のための最初の一步として、カント自身の論理思想の現代的な再構成を試みたい。